



▲高原さんが手にするのは、JR岡山支社公式キャラクター「くまなく・たびにゃん」。SNSで配信する写真撮影に使用している

津山の人・物・技術
など、明日誰かに自慢
したくなる津山のいい
ところを紹介します

24
つやまじまん

ええとこ
いっぱい

津山 自慢

津山市観光誘客アドバイザー・
DMOマネージャー（津山市観光協会）
高原 晃さん（鏡野町）

1992年からJR西日本に勤務。2019年6月からJR岡山支社広報室長を務めた後、JRから出向で2022年4月に津山市観光協会DMOマネージャーに就任。城東・城西地区の歴史資源や津山まなびの鉄道館の情報発信に取り組む。53歳。

JR西日本から津山市観光協会へ

「JR西日本と津山市が、地域共生に取り組むと知り、津山市観光協会のDMOマネージャーに挑戦したいと思いました」と話す高原さん。津山の歴史と鉄道の魅力をアピールしていきたいと語ります。「入社9年目のJR本社営業本部の時、京阪神地区を発着点にした津山への日帰り旅行プランを作りました。市内の店舗や施設の皆さんの協力で実現できた良い思い出があります。22年が経ち、再び津山でイベント企画や観光客のおもてなしに携わり、津山との縁を感じます」と話します。

新観光列車津山線で運行開始

今年7月から9月まで開催した岡山デザインেশョンキャンペーンをきっかけに、観光列車「SAKURA美SAKU楽」号が運行を始めました。「期間中、スローライフ列車、観光列車あめつち、急行砂丘号の運行などがありました。地元でのおもてなしに地域の皆さんと取り組み、津山の観光をPRする一員になれたと思います。キャンペーン後も、観光客の受け入れ方や仕組みづくりで、改善できるところを見直していきたい」と抱負を語ります。

津山のブランド力を強めたい

津山は観光資源が豊富だからこそ、ブランド力が低下しないように、今が見直す時期だと言います。「鳥取道や播磨道の整備により、隣県からのアクセスが良くなりました。道路や鉄道の交通網を軸に、津山だけでなく、地域全体で観光連携を図り、津山のブランド力を強化していきたい。2024年秋に県北地域で、県が中心になって企画したアートプロジェクトが開催され、自治体とJR西日本が連携します。イベントが観光連携の助になれば」と将来を見据えます。

津山市内の高校に通っていたので、津山への思い入れがあるそうです。「高校生活を過ごし、社会人になってからも思い出が残る津山で仕事をするようになりました。地元に戻ってきたという気持ちを強く感じています。

昨年までJR社員として、2か月に1度、津山まなびの鉄道館で観光協会の人と意見交換してきました。立場が変わり、今まで意見を交わした相手と同僚になって、一緒に仕事をすることが不思議な感覚です。みんなで協力しながら、津山の観光PRを進めていきたいです」と笑顔で語りました。

※DMO＝魅力的な観光地として、特定の場所を宣伝する組織

つぶき
やき
編集室

3年ぶりにだんじりの巡行があった津山まつり。大隅神社の秋祭りを取材しました。地元の祭りにはだんじりがなく、疾走する姿を間近で見るのは初めて。だんじりに乗った子どもたちの「ソーヤレ」の掛け声や、息を合わせて曲がり角を曲がる様子に、脚立を担いで動き回った疲れも吹き飛ばすようでした。

令和6年に開催される全国植樹祭のプレイベントを取材しました。植樹に参加した小学生が「木が大きくなって、リスや鳥の巣になって、自然がいっぱいになって欲しい」と話してくれました。優しい気持ちを込めて植えられた木々。子どもたちが大人になったとき、どんな森に成長しているでしょうか。

津山自慢の高原さんと初めて会ったのは2年前、広報津山の取材の時でした。JR広報室長の落ち着いた行動は今も覚えています。マネージャー就任後は、取材先で顔を合わせる機会が増え、いつか高原さんを記事にしたいと思うようになり、今回実現できました。人と人との縁は大切にしていきたいです。

編集・発行
津山市企画財政部庶務広報室（〒670-0851 岡山県津山市北320

0868-32-2029
0868-32-2152
kouhou@city.tsuayama.jp

広報津山は、環境保護のため再生紙と植物性インキを使用しています。読者のためにも、紙の裏面に「リサイクル」のマークを印刷しています。

広報津山
電子版



津山市公式
フェイスブック



津山市公式
LINE



津山市公式
インスタグラム

